

論 文

夏目漱石の『こゝろ』とゲーテの『若き ウェルテルの悩み』との関連性と比較

ツグラッゲン・エヴェリン

はじめに

夏目漱石（一八六七～一九一六年）は英文学を学び、イギリスに留学したことで知られるが、ドイツ文学とのつながりについての研究は、漱石の『我輩は猫である』とエルンスト・テオドール・アマデウス・ホフマン（一七七六～一八二二）の『牡猫ムルの人生観』（*Lebensansichten des Katers Murr*, 一八二〇）との比較研究がある。しかし、漱石とヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（一七四九～一八三二）とのつながりが今まであまり注目されてきたとは言えず、本稿の中でこのつながりについて論じていく。ゲーテの『若きウェルテルの悩み』（*Die Leiden des jungen Werthers*）が書かれたのは一七七四年、漱石の『こゝろ』が書かれたのはちょうど一四〇年後の一八一四年であった。両方の小説の生まれた時代と背景が異なるにも関わらず、類似点が多く見られる。

A・オーウェン・アルドリッジは *The Japanese Werther of the Twentieth Century*（「二一世紀の日本のウェルテル」）という論文の中で漱石の『こゝろ』とゲーテの『若きウェルテルの悩み』（以下『ウェルテル』と略す）を比較している。アルドリッジによると、漱石がゲーテの作品を読んだかどうかにも関わらず、『こゝろ』と『ウェルテル』の類似性が非常に高いということが、結論として漱石が『ウェルテル』を知っていたことの証左であるとする¹。

本稿ではゲーテの『ウェルテル』と漱石の『こゝろ』にどのような関連性があるかをさらに探っていきたい。アルドリッジの論文の中で述べられたそれらの類似点と差異点を取り上げてから、まだ発表されていない類似点と差異点を明らかにしていく。

一 漱石は『若きウェルテルの悩み』を知っていたか

アルドリッジは『ウェルテル』と『こゝろ』の類似点が多く見られることに加え、漱石の『吾輩は猫である』の中に Werther (エルテル)² という名が四回取り上げていることを、漱石が『ウェルテル』を知っていたことのもう一つの証拠であるとする³。

『吾輩は猫である』が明治三十八・三十九年(一九〇五・一九〇六)、『こゝろ』が大正三年(一九一四)、に発表されていることから、漱石が両作品を執筆する以前にゲーテを知り、『ウェルテル』を読んだ可能性は十分に考えられる。

明治二十二年(一八八九)と明治二十四年(一八九一)に『ウェルテル』の英語版から和訳された『ウェルテル』は部分的な翻訳であり、森鷗外を中心に創刊された雑誌『しがらみ草紙』の中で連載された菅田肇の『若きエルテルがわずらい』はドイツ語の原本から和訳されたものであった。しかし日清戦争(一八九四～一八九五)で雑誌が廃刊になったため、未完に終わる。この『しがらみ草紙』は当時文壇の注目の的だったため、大きな影響を及ぼし、日本でもいわゆる「ウェルテル熱」という現象を生み出し、当時の青年をひきつけたといわれている。のちの明治三十七年(一九〇四)、久保天随によってやっとドイツ語原本から完訳がされた⁴。実は「ウェルテル熱」の現象が起きた明治二十年年代の後半は、漱石の大学・大学院時代と重なる。

『吾輩は猫である』執筆時点で、『ウェルテル』全編を漱石が読んでいたかどうかは定かではないが、アルドリッジによる両小説の比較からも分かる通り、『こゝろ』執筆時までには『ウェルテル』全編を読んでいたと思われる。

つまり漱石は『しがらみ草紙』に連載された未完のもの、またはドイツ語から完訳されたもの、または英訳版⁵のいずれかは読んでいた可能性が高い。さらに漱石は留学中（一九〇一～一九〇三）に英語版を読んだ可能性もある。

漱石は帝国大学（のちの東京帝国大学）の大学院で学んだときにドイツ系ロシア人ラファエル・フォン・ケーベル（一八四八～一九二三）という教授の授業を受けたことがある。漱石は中途退学したが、のちにケーベルについて随筆を書いた。随筆「ケーベル先生」によると、漱石はケーベルが日本に来て始めての美学の講義を聴いていることがわかる⁶。『近代文学研究叢書第二十二巻』によるケーベルの授業に関する記述をまとめると、講義の中では一般詩学、キリスト教の歴史・哲学、ドイツの文化・学術・文学なども扱ったという⁷。そしてケーベルは、哲学の特殊講義に際し、選んだ内容にはファウスト論等もあった⁸。このようにケーベルの講義を通して、漱石がドイツ文学とゲーテの作品を知るようになった可能性が高いと考えられる。漱石がケーベルによってゲーテを知るようになったことに加え、当時の時代状況からも『ウェルテル』を知ることができたことは確かである。そしてもし漱石が『ウェルテル』を読んだならば、その美しさに感銘しただろう。漱石の作品を、ドイツ文学、特にゲーテの作品と関連付けて考えることは、重要な意味を持つといえる。

二 アルドリッジがみる両小説の類似性と差異性

A・オーウェン・アルドリッジは *The Japanese Werther of the Twentieth Century*（「二一世紀の日本のウェルター」）の中で両小説の類似性を以下の点にわたって述べて、表に差異点をまとめる。

一、三つの部分からできている。『ウェルテル』は第一部、第二部、第二部の半ばから「編集者より読者へ」という解説があるので三部形式とみることができる。『こゝろ』は上、中、下からなる。

一、短編小説である。そして様々な出来事の連続よりも、小説の中にあふ

れ出る雰囲気や個性的な登場人物による影響力のほうが大きい。書簡体小説であるが、書簡体小説の形式が完全に守られているわけではない。

一、登場人物にはそれぞれ三角関係がある。『ウェルテル』の場合、ウェルテル、ロッテ、アルベルトからなる一つの三角関係がある。『こゝろ』の場合、三つの三角関係がある。すなわち①語り手の「私」、先生、静、②語り手の「私」、先生、K、③先生、K、御嬢さん（静）である。この中の③が『ウェルテル』の三角関係に一番似ている。

一、男性の登場人物は、詳しく描出されているが、女性の登場人物は表面的にだけ描出されている。

一、女性の登場人物が結婚する相手は、その女性の最も愛する人であるかは定かではない。

一、両小説の主人公（先生とウェルテル）は暗い人生観をもち、感情の危機がある。彼らの人嫌いと孤独と自殺というテーマとなっている。悲劇で終わる。「こころ」という言葉の使い方の類似性。シンボルが多くある。

	『若きウェルテルの悩み』	『こゝろ』
主人公の感情と視点	青年	成人
小説出版時の作者の年齢	ゲーテは二十五歳	漱石はゲーテの二倍の年齢に近い
小説に反映されること	時代の精神より作者の心情	明治天皇が亡くなった一九一二年の日本の精神的雰囲気（天皇の死と共に明治精神もなくなったから）
自伝的？	自伝的。小説はゲーテ自身が経験した失恋を反映している。	漱石が小説を書いた時にあった個人的な感情は小説に反映されてないと考えられる。
内容すべてが	過大であり、過激である	地味であり、控えめである
出版年	一七七四年	一九一四年
文学の時期	ドイツのロマン主義	自然主義とロマン主義
読み取れる文化の違い	気ままに感情を発散する	形式的であり、地味である。漱石にとって愛の感情の描写は重要視されていない。

アルドリッジの論文は一九八八年に発表され、三〇年以上前のものだが、研究成果として今でも十分な価値がある。次にアルドリッジの論文の中でまだ述べられていない点について論じていく。

三 『若きウェルテルの悩み』と『こゝろ』のさらなる比較

両方の小説を読んだ最初の印象は、両小説が特に似ているとは思わないことである。しかし比較してみると、類似点が多く見られる一方、差異点も多くある。『ウェルテル』はドイツのロマン主義運動の中で生まれた作品であるとアルドリッジは述べている⁹が、実際に生まれた文学の時代は「シュトゥルム・ウント・ドラング」（一七六五～一七八五）という時代である。論文の中で『こゝろ』はロマン主義の要素があると述べられているが、実際は、『こゝろ』は反自然主義文学に属している。当時の日本の文学の主流はロマン主義と自然主義であった。両小説の評判に関しても類似性が見られる。すなわち両小説が生まれた時代と文化の背景は異なっているにも関わらず、両小説は当時ベストセラーとなった。時代が異なるがこのことから両小説が扱っているテーマは同時代の人々に感動と刺激を与えたといえる。両小説が書かれたきっかけの一つである当時の時代背景も似ている。すなわちゲーテ自身の友人であるカール・イエルーザレム（Karl Jerusalem, 一七四七～一七七二）の自殺、また漱石の同時代人である乃木希典（一八四九～一九一三）の自殺、は二人の作者が自殺について考察するきっかけとなり、執筆にあたって大きな刺激となった。きっかけとなったそれぞれの自殺の二年後に不思議にもそれぞれの国で自殺をテーマに扱う小説が生まれた。イエルーザレムは平民なので貴族からは十分に認められず、人妻に対する一方的な恋で悩み、その彼女に拒否されたことから絶望し自殺してしまった。ゲーテはイエルーザレムの事件を直接、小説で取り上げてはいないが、イエルーザレムはウェルテルのモデルとされている。『ウェルテル』の中では絶望と自殺だけではなく、身分差別というテーマも扱われている。『こゝろ』は乃

木希典の歴史的な事件を直接扱い、かつ小説の登場人物である先生と K が自殺してしまう。

歴史的な事実として当時多くの若い人が小説『ウェルテル』を読んでから、似た悩みを抱えてウェルテルの自殺を真似してしまったことがある。この出来事は『ウェルテル』が出版された二〇〇年後「ウェルテル効果」と呼ばれ、社会学者デイヴィッド・フィリップス (David P. Philips) により実証され命名された¹⁰。現在では「ウェルテル効果」とはマスメディアの自殺報道に影響されて自殺が増える事象を指している。ゲーテの時代は、自殺は教会から見ると罪業であり、『ウェルテル』を読んだ人の多くは、自身の道徳的宗教的価値観と相容れなかった。『こゝろ』の場合は、ウェルテル効果による事件等が起こった記録はない。

両小説の主人公の心情または感情は自然環境に反映されている。言い換えれば、小説内の自然環境は主人公の心情を映している。ただ『ウェルテル』の場合は心情を自然環境に反映するような書き方が『こゝろ』より明らかに多い。ウェルテルと自然との関係は強く、彼の次のような言葉にそれが表れている。「灌木などがほくに自然の内面の燃えるような神聖な生命を啓示してくれるとき、ほくはそういうものすべてをほくの心の中へ抱きいれ (省略)」¹¹ ウェルテルの感じた愛、失恋、安穩など様々な感情は、文章内の自然環境の変化を通し描写されることで、読者により強く印象付けられる。このような書き方は、効果的な表現技法である。例えばウェルテルは八月三十日のヴィルヘルム宛の手紙の中で次のように述べている。

「時折、悲しみのあまりに、ロッテが許してくれるのを幸いその手をとってみじめにも胸の苦しさを涙で晴らそうとする——そんなとき、ほくはもういたたまらず外へ逃げ出す。そうして遠く野原をほつつき歩く。けわしい山に登る。道もない森に分け入り、藪に傷つきいばらに刺されるのがせめてものよろこびなんだ。そうしているといくらかでも楽になる。いくらかでも。」¹²

『こゝろ』の場合、このような場面は少ないが、例えば先生と K が夏に二人で海に旅行に行った時、先生の、御嬢さんへの恋心を K に打ち明けるかどうかという悩みと、K に対しての様々な感情が回りの自然環境の描写で次のように表現されている。

「こんな風にして歩いていると、暑さと疲労とで自然身体の調子が狂って来るものです。尤も病気とは違います。急に他の身体の中へ、自分の靈魂が宿替をしたような気分になるのです。私は平生の通り K と口をききながら、何処かで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りという特別な性質を帯びる風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮のため、又歩行のため、在来と異なった新しい関係に入る事が出来たのでしょう。その時の我々はあたかも道づれになった行商のようなものでした。いくら話をしても何時もと違って、頭を使う込み入った問題には触れませんでした。」¹³

この二つの引用文から、自然の中で歩くことは、両方の主人公の悩みの解決にはならないが、少しだけ悩みから開放される良い効果がある、と解釈できる。ウェルテルの場合は茨、先生の場合は暑さが心の悩みを表現すると同時に、この悩みを和らげる役割もあると解釈できる。同じように両小説で季節ごとに、その季節に合った出来事が起こっている。以下に、両小説のあらすじを季節の流れに従ってまとめてみる。まず『ウェルテル』の第一巻で、ウェルテルがロッテと知り合い、情熱が燃えあがるような思いを体験する。この時恋愛感情と生気にあふれる夏となる。次にロッテの婚約者アルベルトが旅行から帰ってくることによりウェルテルの気持ちに暗い影が落ちる。それは秋の訪れと同時に起こる。第二巻でウェルテルは、遠く離れた町で仕事をし、ロッテから離れて暮らさなければならなくなる。その時季節は冬である。この冬にアルベルトとロッテが結婚式をあげたことと、貴族の社交界で身分差

別による屈辱的なあつかいを受けたことは、ウエルテルに精神的打撃をあたえた。翌年の春、内面の癒しを求めて生まれ故郷を訪ね、夏にはふたたびロッテのもとへ戻っていく。しかし、秋になるとウエルテルの心の中も秋になる。ロッテと知りあってから二度目の冬にウエルテルは自制することができず自殺をしてしまう。次に『こゝろ』の「上」と「中」では、大学生である「私」が先生と夏に海で知り合う。冬になると「私」の父が倒れた、という手紙が母から届き、「私」は帰省する。そして父の病状が落ち着くと東京に戻る。次の夏の始まり、先生と「私」は自然の中で散歩し会話をしながら、友情と信頼関係を深める。夏休みの間「私」は帰省する、父の病状はさらに悪化、先生から長い手紙が届く。『こゝろ』の「下」で、先生は春学期の始まりに引越し、未亡人と御嬢さん(のちに先生の妻となる)と一緒に暮らすことになる。御嬢さんを気に入り、彼女を信用するようになる。同じ学期に先生の友人であり大学生のKも一緒に暮らすことになる。Kも御嬢さんと親しくなる。それがきっかけで、先生はKへの嫉妬心を抱く。夏休みになると、先生とKが海に旅行をしに行く。旅行をしながら二人は夏の暑さの中で様々な会話をしますが、先生はKに自身の御嬢さんへの思いを打ち明けることができない。家に帰ってからも同じ問題が続く。年末になるとKは先生に御嬢さんへの愛を告白し、先生に意見を求める。その後、先生は未亡人に対し御嬢さんをくださいと頼み、結婚する許可をもらう。同じ冬にKが未亡人からこの事実を知った直後、手紙を残し自殺してしまう。『こゝろ』の中では、夏は三回も男性の登場人物が友情を結ぶ時期となる。「上」の最初の夏に大学生が先生と知り合う。翌年の夏、二人が友情を深める。「上」で描かれる先生とKの夏の海の旅行の時も、二人が人間関係を深める。しかし興味深いことに、先生と御嬢さんの関係、またKと御嬢さんの関係と、自然環境または季節が連動する場面が、特に描かれていない。

次に両小説の中で「遺産(相続)」というテーマが扱われている。『こゝろ』の場合は「遺産」またはお金に関わる問題が肝心なテーマである。先生は青年時代に両親を亡くす。その後、先生を養子にした信頼する叔父は、先生の

遺産を奪ってしまう。この出来事は、先生にとって人間不信となる原因となった。『ウェルテル』の場合は「遺産」というテーマは全部で三回¹⁴短く取り上げられているが、『こゝろ』の場合のような肝心なテーマではない。一七七一年五月四日に書かれた最初のヴィルヘルム宛の手紙の中でウェルテルが遺産について次のように述べている。

「こっちに残っている遺産の分け前のことで母が苦情をいっていると叔母にいったんだ。するといろいろな理由や原因や条件をあげてね、それが承知ならいつでも全部引き渡す、ぼくらのほうで要求している以上のものをくれるというんだ。（省略）しかし、ねえ君、今度のちょっとした事件でもやっぱりそう思ったんだが、奸計や悪意なんかよりも、誤解や怠惰のほうがよくどいざござの基になるんだね。すくなくとも前の二つのほうがたしかに珍しいんだ。」¹⁵

ウェルテルは遺産にまつわる出来事に関して、伯母の悪意ではなく、誤解と怠慢がその原因になっていたと述べている。したがって、ウェルテルは人の悪意よりも善意の方を信じているといえる。それに対して、先生は叔父に裏切られてから様々悩み、最終的にはKを裏切ることになった。そして「世間はどうかろうともこの己は立派な人間だという信念が何処かにあったのです。それがKのために美事に破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです」¹⁶ということに気づいた。それに対してウェルテルは自身の悩みの原因が自身の心にあると気づいて次のように述べている。「ぼくの心こそは（省略）いっさいの根源、すべての力、すべての幸福、それからすべての悲惨の根源なんだ。」¹⁷「いっさいの罪が自分だけにあることはわかりすぎるくらいわかっているんだ。—いや、罪じゃない。つまり以前いったいの幸福の源がぼく自身の中にあったように、いっさいの悲惨の源はぼく自身の中に隠されているのさ。」¹⁸つまり彼の心は悩

みと同時に幸福の源泉でもある。しかし、ウェルテルはこれに気付いたのに、最終的に自身の心を変えることができず、悩みを乗り越えることができなかった。この意味では、先生とウェルテル、二人ともが罪意識を持っている。ウェルテルにとって罪意識の原因は自身の心にある。先生の罪意識の原因はKに対しての裏切りである。これが、Kが自殺する原因となったと先生は考えている。しかし、先生はKを裏切った理由も先生の心の弱さにあるといえる。

四 三角関係・会話・宗教性・女性観の類似性と差異性

アルドリッジは『こゝろ』には三つの三角関係、『ウェルテル』には一つの三角関係があると述べている。しかし『こゝろ』の場合は四つ目の三角関係も考えられる。すなわち④先生、御嬢さん、お母さんである。『ウェルテル』の場合は二つ目の三角関係が考えられる。すなわち②ウェルテル、ハインリヒ、作男である。アルドリッジは『こゝろ』の③先生、K、御嬢さんの三角関係は『ウェルテル』の①ウェルテル、ロッセ、アルベルトの三角関係に一番似ていると述べている。もう一つ似ている三角関係は、『こゝろ』の②語り手、先生、Kと『ウェルテル』の②ウェルテル、ハインリヒ、作男である。両方の三角関係の人物の宿命と悩みの中に類似性が見られる。『ウェルテル』の場合、三人ともが恋愛で悩んでいるが、それぞれの宿命は異なる。ハインリヒは狂ってしまい、作男は殺人を犯してしまい、ウェルテルは自殺をしてしまう。『こゝろ』の場合は先生とKはともに恋愛で悩んでいたが、最終的に二人の自殺は、先生の場合は、それが原因であるとはいえないし、Kの場合は、それだけが原因であるとはいえない。ここで登場人物の死に関して述べる。両小説内で書かれた人の死の回数は、『こゝろ』の場合は五回であり、『ウェルテル』の場合は三回であるが、死の原因は様々である。『こゝろ』では、先生とKが自殺し、大学生のお父さんが病気で亡くなる。そして明治天皇の病死と乃木將軍の殉死である。『ウェルテル』では、ウェルテル、とウエル

テルがアルベルトとの会話の中で取り上げている少女が二人とも自殺し、作男の恋敵が作男によって殺されてしまう。『ウェルテル』の場合、この三つの死の原因は全て失恋にある。『こゝろ』に起こる五つの死の原因は、様々である。

次に両小説の中で交わされる会話について、類似性と差異性を論じる。ウェルテルとアルベルトは会話の中で自殺について議論している。またウェルテルはロッテと日常会話をする他に、人間の心や人生の悩みや宗教など様々なテーマについて会話し、最後にオシアンの歌を一緒に読んでいる。またウェルテルは町を離れる際にロッテとアルベルトとの会話の中で、ロッテは亡くなったお母さんを思いだし、彼女と再会したいと言った。また先生とKの会話は「愛」や「女性」などについての抽象的なテーマが多く、哲学的で宗教的である。それに比べ先生と御嬢さん（静）との会話は回数が少なく、内容は抽象的とはいえず日常的なテーマについてであり、哲学的宗教的な会話をすることはない。その理由は当時の日本の教育と関係があると考えられる。当時日本では、女性は大学には通えなかった。それに対し、ドイツでも女性が大学に通うことはなかったが、ロッテは御嬢さんよりも難しいテーマについて他人と会話をすることができた。両小説は宗教性がテーマとなっており、会話の中でもそれが取り上げられている。Kやウェルテルは、宗教的な一面を見せているが、先生の宗教についての考えは表現されていない。Kの宗教性については、先生が次のように述べている。

「私は又彼（K）の室に聖書を見ました。私はそれまでに御経の名を度々彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教に就いては、問われた事も答えられた例もなかったのですから、一寸驚きました。私はその理由を訊ねずにはいられませんでしたが。Kは理由はないと云いました。これ程人の有難がる書物なら読んで見るのが当たり前だろうとも云いました。その上彼は機会があったら、コーランも読んで見る積りだと云いました。彼はモハメッドと剣という言葉に大いなる興味を有っているようでした。」¹⁹

このようなKの宗教への探求心は、先生との海への旅行の時にも見られる。二人が日蓮の誕生寺のそばを通った時、Kは寺の坊さんに日蓮のことをしきりに聞いたがった。結局中に入り、話を聞いた。「坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向かって日蓮のことを云々し出しました。」²⁰ 一方ウェルテルは、ロッテと一緒に牧師さんをたずねる場面があったり、会話の中やウィルヘルム宛の手紙の中でも、神についての自身の考えやその葛藤について述べている。例えば十一月八日の手紙の中では、「ぼくは宗教を尊敬する（省略）宗教は多くの疲れた人には杖となり（省略）ただ——いったい宗教は誰にたいしてもそうありうるのだろうか、そうなければならんのだろうか。広い世間を見渡せば、宗教がそんなふうでないたくさんの人がいることがわかるはずだ。」²¹ とウェルテルは書いている。この言葉のあとウェルテルは、宗教では、自身の悩みの慰めまたは解決にはならないということを神に訴えている。そして別の場面で、悩みの源泉は自身の心の中にあるということにウェルテルは気づく。『ウェルテル』は聖書の言葉で溢れている。ウェルテルとKは宗教性を持っているにも関わらず、結局宗教では彼らの悩みの解決はできず、宗教は彼らの救いにはならなかったことが両小説に共通に描写されている。

両小説内の会話の場面から、先生と御嬢さん（静）、またはウェルテルとロッテが本音を言うかどうかということが分かる。『こゝろ』の場合、夫婦は心のつながりが薄い。先生は御嬢さん（静）に本音を話さないで、自身の感情も出さない。逆に、静は先生の行動が全く理解できないと泣く時もある。『ウェルテル』の場合、ウェルテルとロッテ二人ともお互いに本音を言う。正直であり、感情を素直に表す。つまり、主人公ウェルテルはロッテに本音を言うが、主人公先生は静に本音を言わない。先生は最後に自殺の手紙の中で友人（大学生の「私」）にしか事実を告白しない。そしてこの事実を静には言わないでほしいというのが先生の願いである。

両小説では、男性が女性を語って、男性から見た女性が描かれている。こ

の書き方には時代性が感じられる。『こゝろ』の場合は御嬢さんとお母さんが女性の登場人物である。『ウェルテル』の場合はロッテである。ロッテはウェルテルにとって「天使」²²である。御嬢さん（静）は先生にとって「若い美しい人」²³である。女性の心情は主人公の心情と比べるとあまり表現されず、読者が想像しなければならない部分が多い。アルドリッジは両小説の女性の登場人物のキャラクターは表面的にだけ描出されていると述べているが、ロッテは御嬢さん（静）よりは詳しく描かれている。『こゝろ』の「上」では静は「先生」と「私」から見た静として描出されている。静はロッテより消極的である。この二人の女性は、お互い似たような三角関係の中に身を置いている。二人とも片親をなくし、残った親とともに生活をしている。ただロッテは兄弟がおり、御嬢さんは兄弟がおらず一人っ子である。ロッテはアルベルトと婚約しており、彼との結婚によって、家は経済的に安定する。御嬢さんは特に経済的に困っているわけではない。このように結婚する前の状況が異なる二人の女性は、当然家庭の将来への責任感が異なっているといえる。つまりロッテは将来のことを考えているが、御嬢さんはまだ将来のことを考えてはいない。二人の女性の類似性は次の振る舞いの中でも見られる。ロッテは兄弟の面倒を見ている。御嬢さんもKと先生の洗濯物をしている。ロッテと御嬢さんは二人とも家庭的な女性として描かれている。ロッテも御嬢さんも自殺（ウェルテルとKの自殺）を知った時泣いているが、ロッテの方が悩んでいる。「従業は大声をあげて泣きながらしどろもどろである。ロッテは気を失ってアルベルトの前に仆れた。」²⁴と。それに対して御嬢さんは自殺を知ったあとも倒れたりしなかったが、先生は「私が御嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。御嬢さんは泣いていました。」²⁵と。

おわりに

以上、本稿の「三」と「四」で比較した通り『ウェルテル』と『こゝろ』

という二つのベストセラーとなった小説は同じような時代背景をもつ。実在する人物の自殺が二人の作家に自殺について考察する一つのきっかけを与え、執筆にあたって大きな刺激となったわけである。いずれも歴史的自殺事件の二年後に自殺をテーマに扱う小説が生まれたことになる。以下、本稿での比較についてまとめる。『ウェルテル』が執筆された二〇〇年後に「ウェルテル効果」という現象が実証された。『ウェルテル』が出版された当時、多くの若い読者がウェルテルの自殺を真似してしまったが、このような現象は『こゝろ』の場合はなかった。また、両小説の自然環境は主人公の心情を反映している。『ウェルテル』の方がこのような書き方が明らかに多い。さらに両小説において季節ごとに、その季節に合った出来事が起こっている構成があることが分かった。そして「遺産」というテーマが両小説の中で扱われている。つまり『こゝろ』の場合「遺産」またはお金に関わる問題が肝心のテーマで、先生の叔父と関連している。『ウェルテル』の場合は「遺産」というテーマは三回取り上げている中、その一回はウェルテルの叔母と関連している。さらなる共通点は二人の主人公が罪意識を持っていることである。ウェルテルはすべての悩みと喜びの源泉は自身の心にあると意識し、不幸になる「罪」を犯したのは彼自身である。先生の罪意識の原因はKに対しての裏切りにあるが、その理由も先生の心の弱さにあることを最後に意識する。

『こゝろ』と『ウェルテル』を比較して、三角関係・死の回数・会話・宗教性・女性観の類似性と差異性があることが明らかになった。『こゝろ』の場合、先生、御嬢さん、お母さんという四つ目の三角関係、『ウェルテル』の場合、ウェルテル、ハインリヒ、作男という二つ目の三角関係がある。また両小説の中に述べられている死の回数と原因が異なる。『こゝろ』の場合は五回（先生、K、大学生「私」のお父さん、明治天皇、乃木將軍）であり、『ウェルテル』の場合三回（ウェルテル、少女、作男）である。『ウェルテル』の場合の三つの死の原因はすべて失恋にあるが、『こゝろ』の五つの死の原因は様々である。また両小説の中で交わされる会話の中では様々なテーマが扱われている。『ウェルテル』の場合は自殺（ウェルテルとアルベルト）、人

間の心や人生の悩み、宗教やオシアンの歌などの他に日常会話（ウェルテルはロッセ）がテーマである。そして『こゝろ』の場合、哲学的で宗教的または抽象的なテーマが多いが（先生と K）、中には日常的なテーマもある（先生と御嬢さん（静））。会話の中で本音を言うことに関して、主人公ウェルテルはロッセに本音をいうが、主人公先生は静に本音を言わないことが分かった。さらに両小説は宗教性がテーマとなっており、ウェルテルと K は宗教性を持っているにも関わらず、結局宗教では彼らの悩みの解決はできず、宗教は彼らの救いにはならなかったことが両小説に共通して描写されている。なお、先生の宗教についての考えは表現されていない。また両小説では、男性から見た女性が描かれている。ロッセと御嬢さん二人とも片親をなくし、残った親とともに生活をしているが、ロッセは兄弟がいるのに対し、御嬢さんは一人っ子である。結婚する前の状況が異なる二人の女性は、家庭の将来への責任感も異なっており、ロッセは将来のことを考えているが、御嬢さんはまだ将来のことを考えてはいない。さらにロッセも御嬢さんも自殺（ウェルテルと K の自殺）を知り悲しむが、気を失ったロッセの方が悩んでいるといえる。

このように『こゝろ』と『ウェルテル』の類似性から読み取れるように、漱石が『ウェルテル』を実際に読み、『こゝろ』執筆時に参考にした可能性が非常に高いといえる。漱石は英文学を学び、イギリスに留学したことで知られているが、ドイツ文学とのつながりについては注目されているとはいえ、さらなる研究が必要な分野といえる。

注

- 1 A. Owen Aldridge: *The Japanese Werther of the Twentieth Century*, in: *The Comparative Perspective on Literature – Approaches to Theory and Practice*. Cornell University Press, 1988, p. 75 を参考。
- 2 漱石が使われている表記が普段の表記と違って、「今世紀のエルテル」などを使っている。（『夏目漱石全集第一巻』筑摩書房、一九七一年、二三七頁。「エルテル Werther」の語注は三五六頁。）

- 3 前傾注 (1) p. 76.
- 4 田中亮平「明治日本のドイツ文学」、『創価大学外国語学科紀要』二〇〇七年、九四～九五頁を参考。
- 5 『ウェルテル』の英訳は様々がある。最初の英訳はダニエル・マルツス (Daniel Malthus) の *The Sorrows of Werter: A German Story* 一七七九年である。漱石の時代に出版されたのは *The Sorrow of Werter*. Cassell and Company, London, 1905 がある。
- 6 夏目漱石「ケーベル先生」『あのひと一傑作随想四十一編』、新潮文庫、二〇一五年、二四五・二四七頁。
- 7 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第二十二巻』昭和女子大学近代文化研究所、一九五八年、二三七～二三八頁。
- 8 『東京大学百年史・部局史一』東京大学出版会、昭和六十一年三月一日、五八九～五九〇頁を参考。
- 9 前傾注 (1) p.82.
- 10 Philips, David P.: The Influence of Suggestion on Suicide: Substantive and Theoretical Implications of the Werther Effect. In: *American Sociological Review*. Vol. 39, No. 3 (Jun., 1974), pp. 340-354.
- 11 高橋義孝訳『若きウェルテルの悩み』新潮文庫、一九五一年、八五頁。
- 12 前傾注 (11) 九一頁。
- 13 夏目漱石『こゝろ』新潮文庫、二〇〇四年、二五〇～二五一頁。
- 14 前傾注 (11) 七～八頁、二二頁、一三五頁。
- 15 前傾注 (11) 七～八頁。
- 16 前傾注 (13) 三一五頁。
- 17 前傾注 (11) 一二六頁。
- 18 前傾注 (11) 一四六～一四七頁。
- 19 前傾注 (13) 二二三頁。
- 20 前傾注 (13) 二五二頁。
- 21 前傾注 (11) 一四九頁。
- 22 前傾注 (11) 五三頁で「ロツテ」として和訳されているが、原本ではウェルテルがロツテを「天使」(独 Engel) と呼んでいる。(Goethe *Sämtliche Werke*. Hrsg. von Waltraud Wiethölter. Bd. 8. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1994, p.71)
- 23 前傾注 (13) 三〇九頁。
- 24 前傾注 (11) 二一六頁。
- 25 前傾注 (13) 三〇八頁。